

追悼 林一六先生

林一六先生を偲ぶ

土田 勝義

林一六先生は昨年4月末に亡くなられたそうである。私はその訃報を知らずにいたのでご葬儀にも出席できなかった。誠に残念なことであった。もっとも私も隠遁生活をしており交流の幅も狭くなっているのでは仕方ない。お互い定年退職してから10数年、研究生活から離れそれぞれ独自の生活をしており交流も途絶えてしまっていた。ただ毎年賀状を頂いており、ご健在であることは承知していた。まして昨年3月頃、新著（加藤順氏と共著）の「里山の植物生態学」(全国農村教育協会刊)を恵送頂き、まだお元気で調査や執筆活動をされておられるなど安心かつ感心しておりました。拝読後、つたない感想文をお送りし何らかのお返事が有るかなと思っておりましたがとくに有りませんでした。今から思えばその頃はご病気にいられていたのかも知れません。

私が草原生態学を学び始めた1960年代始め頃、林先生は当時植物生態学(主に草原生態学)の権威であった千葉大学の沼田真先生と共著でいくつか論文を出されていました。そのため私は両先生の論文や御著を読んで勉強しました。そんな中で、発足間もない長野県植物研究会が菅平湿原の植生調査を行うことになりました。これは当時東京教育大学菅平高原生物実験所に在籍されておられた林先生のご提案であり、湿原の保護のための調査が急務であるとの訴えによるものでした。調査は研究会の有志のべ11名が参加しました。当時植物生態学分野では植物社会学が急発展し、この調査も植物社会学的方法によるもので、その成果は実験所の紀要(1969)に掲載されています。このおりに林先生に実験所の設備や先生のフィールド、また研究の概要など直接ご教示頂きとても感激したことを覚えています。それ以来私の研究について色々ご教示、ご指導を頂くこととなり、私としては義兄的な敬愛をもつようになり、沼田先生にもご紹介頂くこととなり、沼田先生にも直接ご指導を頂けることになりました。

林先生は常に私の先を行く草原生態学の先導、先駆者として学会で活躍されておられたが、その主たる研究は菅平の実験所にて行われ、そのような地の

利と同所での長期の研究時間を得られたことと大きく関係すると思われます。菅平を研究の本拠地として様々な調査、実験を現地で行い、以下のように研究が進められました。なお先生は一貫して植物遷移の研究に邁進されました。最初の1960年代は先生の研究の開花期であり、また研究内容も遷移初期に重点が置かれ、二次遷移の発達に関わる埋土種子の研究から始まります。それから二次遷移の先駆種の動態を明らかにされ、更に優占種のススキの動態にまでいたりします。そして菅平地方の植物遷移について1970年代初め頃までにほとんど明らかにされました。当時植物生態学は草原についても植生学が盛んに行われており、このような時間軸にもとづく動態生態学の研究はマイナーでした。一応十分な成果が得られたのか、70年代はブラジル北東部のカーチンガ地域の草原等の調査研究が主となり、その地の植生の解析と遷移に関する報告が多くなります。80年代になると日本の草原の二次遷移など全国的な視野に立った論文がみられます。そして88年には中国内モンゴルの調査報告もみられます。外国の調査の経験も重ねられて、1990年に単著で「植生地理学」(大明堂刊)を刊行されました。私としては植物遷移一筋の先生がこのような題名の御著を出版されたことに驚いたものです。早速ゼミのテキストに利用させて頂きました。しかしよく調査や論文執筆の合間に著書の執筆の時間がとれたものだと感心もしました。90年代初期にはアフリカのケニアの乾燥樹林の調査もされておられます。私にとって参考になる重要な研究は、1994年に発表されたススキ草原の実験群落的研究であり、地上部刈り取りによる群落構造の変化に関する論文でした。やっと実験生態学に戻ってこられたと安心したものです。しかしその後もケニアの森林の調査が続けられたようでした。なお当時日本の植物生態学分野では、植生学と種生態学が最盛期を迎えており、特に後者は色々な種についてその生活史や繁殖方法が解明され、また保全生態学、あるいは生物多様性が言われるようになってこの分野に重点が置かれるようになりました。そのおりにこのことで林先生に伺ったところ、色々な種の生態が解明されているが、対象とすべきは、先駆種や優占種などの群落形成における重要種について研究すべきではないかと言われたことが印象に残っています。すなわち群落やその動態の

中で他種と関わりながらどう植物が生きていくのかを解明するのが必要であるということです。そこで1997年に日本の温帯林の二次遷移優占種の個生態（種生態）をまとめられている。なお先駆林のアカマツ林がコナラ林に遷移していく一つの様相として、野鳥のカケスのどんぐりの貯留行動が大きく関係しているという説も出されておりました。従ってこれによって植物遷移の初期から樹林に至るまでの遷移過程を網羅されたことになります。先生は理論にもとづく実験とその成果をまた理論化するという科学の本道をあくなき探究心で完遂された研究者として高く評価したいと思います。そして2003年にまた「植物生態学 基礎と応用」（古今書院刊）という単著を出版されました。これは先生の植物生態学研究の集大成です。その後は特に目立った論文等はありませんでしたが、昨年、「里山の植物生態学」を出版されました。2011年より地元の方々で里山の調査を重ねられ約10年間の結果をまとめられたものであるということです。私は定年後の先生とは交流が途絶えてしまったので、その後の先生のご活動は存じませんが、地元の方々とは色々ご指導、交流されていたようです。昨年突如といっていらいに亡くなられたことを伺い、啞然とすると共に、自分の研究に多大なご教示を頂いたことに感謝の念がさらに増しました。日本の植物生態学界において大きな損失であると共に、さらに跡を継ぐ人達を切望してやみません。私にとってはすぐ上の先輩であり、指導者でもありましたが、いつもやさしく、また丁寧に接して頂き、晩年の交流が途絶えてしまったことを今は後悔しております。近年軽井沢植物園によく行きますが、帰りに菅平湿原に寄って植物観察をすることがあります。寄る度にいつもここが林先生との出会いの場だと思ひ浮かべながら昔を偲んでいました。ご冥福をお祈りいたします。

松本市 信州大学名誉教授 土田 勝義

林一六 先生を偲んで

佐藤利幸

永きにわたり長野県植物研究会に尽力された林一六先生が、昨年（2023.4.28）83歳で亡くなりました。長野県植物研究会・研究会誌の立ち上げ（1968）から尽力され、1992から2007の15年間に互に研究会会長を務められました。植物研究

会誌創刊号に「植物の生活様式の適応」、2～3号に「植物の生育型についてI～II」が掲載され、その後もブラジル東部やアフリカの植生などの調査報告紀行など多数報告されています。後半は加藤順さんらとの多数の共同研究があります。千曲川最上流の川上村出身であり、野沢北高校から千葉大学・東京教育大学大学院（筑波大学）に進学され、1965年から菅平高原にある筑波大学高原生物実験場に赴任され、2003年まで約40年間植物生態学の教鞭をとられました（教授・所長・名誉教授）。筑波大学教授として菅平と筑波キャンパスとの往復の多忙な激務のなか、長野県植物研究会例会にも参加され、研究会の発展を支えて下さいました。日本の植生・生態学を牽引された傑出した大先生なのに、すべての研究会会員に優しく丁寧に対応される姿に、いつも感銘をうけました。ここでは個人的な林先生とのエピソードに偏りますが、ありし日々を偲んで追悼させていただきます。なお、公的な追悼文は出川洋介先生によって「林一六先生への感謝」として「菅平生き物通信100号（菅平高原実験場発行2023.12）」に掲載されております。

林一六先生に初めてお会いしたのは、三島市の国立遺伝研究所での種生物シンポジウムであったかと思ひます（1981年）。亡き河野昭一（京都大学）先生からのお誘いであったかと思ひます。私は28歳の北大低温研PDであり、林先生は42歳で筑波大学菅平実験センター助教授であられたかと思ひます。自分の発表内容は忘れましたが、林先生の講演内容「森（草地）からすっかり植物を取り去り、侵入種子からの二次遷移の追跡実験する計画・実践」だけは鮮明に記憶しています。研究とはこんなに壮大で厳密に追及しなければならないのか・・・と圧倒されたことを思い出します。その後、生態学会・植物学会などでいつも励ましていただき、専門用語の厳密な定義から話される林先生の講演をいつも楽しく勉強させて頂きました。後、信州大学理学部への転勤もあって、20数回は菅平筑波高原生物実験所のお世話になりました。そこは現信州大学の東城幸治副学長の博士課程の出身地でもあり、信州大学自然環境診断マイスター養成の実習カリキュラム（動物生態：担当東城先生）で何度もお世話になった舞台です（2007-2009）。その実習のたびに実験圃場を眺めさせて頂きました。植林地のブナも成長して、林床の植物が減っていきました。草地はいまも樹木侵入は少なく、パッチ状に低木が点在してい

ます。私が43歳で信州大学理学部に転勤できたことを喜ばれ、長野県植物研究会への参加を勧めて下さりました。先生とお会いできてから42年もの歳月が流れました。先生の教育研究生活史のほぼ半分を生態学会・植物学会・長野県植物研究会を通して覗かせていただきました。有難いことです。

菅平湿原には本州でただ一か所生息するクロミサンザシが知られています。北海道に広く点在し、私の故郷（北北海道・枝幸町歌登）には集中分布しております。生家の牧野にも20本ほど確認できました。菅平湿原での存在は東城先生から紹介してもらい、湿原保護されたのは林先生だったようです。隔離分布や保全の価値を教えてくださいましたのも林先生でした。林先生の故郷の川上村周辺の調査もさせてもらいました。オノオレカンバやイワカゲワラビが隔離分布する地域となります。北東信州（菅平や川上村）は北海道と共通する寒地植物群が多産する場所です。

林先生の多数の研究のなかで、ブラジルカーチンガの植生研究、植生地理学（自然地理学講座）・植物生態学（基礎と応用）、里山の植物生態学の著作を通じて、植物群落には必ず優占種が出現することなど、多くを先生から教授頂きました。沼田真先生の愛弟子として、植生学から出発して植物生育形、植物社会学、実験生態学へと動的な研究展開の軌跡、が林先生の研究成果には散りばめられていま

す。加藤 順さんと共著された「里山の植物生態学」には温度差を使った発電装置の紹介があります。温度差の自然エネルギー活用例として発展展開してほしい分野です。北海道・シベリアなど寒地の多雪・厳寒を自然エネルギーに転換するヒントがありそうです。沼田真先生が千葉中央博物館館長で居られた1997年、カムチャッカのハイマツ研究者のホメントフスキー先生がぜひ沼田先生に会いたいと来訪され、同行させて頂きました。翌年ホメントフスキー先生は55歳で亡くなりました。ソビエトからロシアへの激動の10年間、日本とロシアの一瞬の交流の日々でした。私にとって専門外の植生調査報告（アマゾン・マレーシア・シベリア・カムチャッカ）の手ほどきを頂いたのも林先生でした。ちなみに水生昆虫の発生遺伝を専攻された東城先生の卒論審査の一人が林先生だったとのこと。「寒地生命系の隔離分布の縁故」とは不思議なものです。文中の林一六先生・河野昭一先生・沼田真先生・ピョートルホメントフスキー先生が故人となりました。ちなみにカムチャッカのアパート周辺の刈り込まれた生垣のクロミサンザシが印象的でした。カムチャッカ半島西部で写真家星野道夫さんがヒグマの犠牲となった頃の出来事です。雪の降り積む小樽市星野町で、さびしくも林先生にまつわる人脈の思い出に浸っております。ありがとうございました。

小樽市星野町 信州大学名誉教授・研究会会長
佐藤 利幸

